

『オーシャンズ』 原題: OCEANS フランス/カラー/シネスコ/103分/配給:ギャガ

2010年1月22日(金)より、TOHOシネマズ日劇ほか全国ロードショー

フランス語ナレーションには英語字幕スーパー。日本語版のナビゲータは女優の宮沢りえ。



(C) 2009 Galatee Films - Pathe - France 2 Cinema - France 3 Cinema - Notro Films - JMH-TSR

---

『オーシャンズ』映画紹介

塚田三千代 (映画アナリスト/映画英語教育学会)

「海ってなんだろう？」という少年の問いに答えて、映像で海洋のリアルな姿がつぎつぎと描き出される。まさに海の真只中にいるような臨場感を味わえる映画である。

少年と海洋研究専門の老教授が映画の始めと終わりに登場するほかは、主役はすべて大海原を自由に泳ぎまわる生き物たち——海面を群れで疾走するイルカ、海中を渦巻く魚群、上空から直滑降でダイビングして狩りをする渡り鳥。静と動のコントラストで描きだされる弱肉強食の世界や、近接撮影でクローズアップされたクジラの表皮があまりにもデザイン的でその精巧さに驚嘆する。

深海の生き物たちの生態はまるで人間の立ち振る舞いとおなじ。コブダイの人間の顔を連想するユーモラスな表情にはつい爆笑してしまう。蟹の大群の移動は時に笑わせ、怒り、恐怖を感じさせるが、どれもつぎつぎと感動を与えてくれる生き物たちである。

ジャック・ペランとジャック・クルーズー監督は、この映画を海洋生物ドキュメンタリーでありながら、その域を越えた映像芸術の作品にしあげたと言えよう。そして、自然の環境汚染や乱獲による絶滅危機に瀕する種を救うために、自然と人間との共存を願い静かにつぶやいているのがよく伝わってくる映画である。

子供から大人まですべての人にお薦めしたい映画である。

珍しい生き物の名前や生息場所を解説したパンフレットも発売されている。



(C) 2009 Galatee Films - Pathe - France 2 Cinema - France 3 Cinema - Notro Films - JMH-TSR

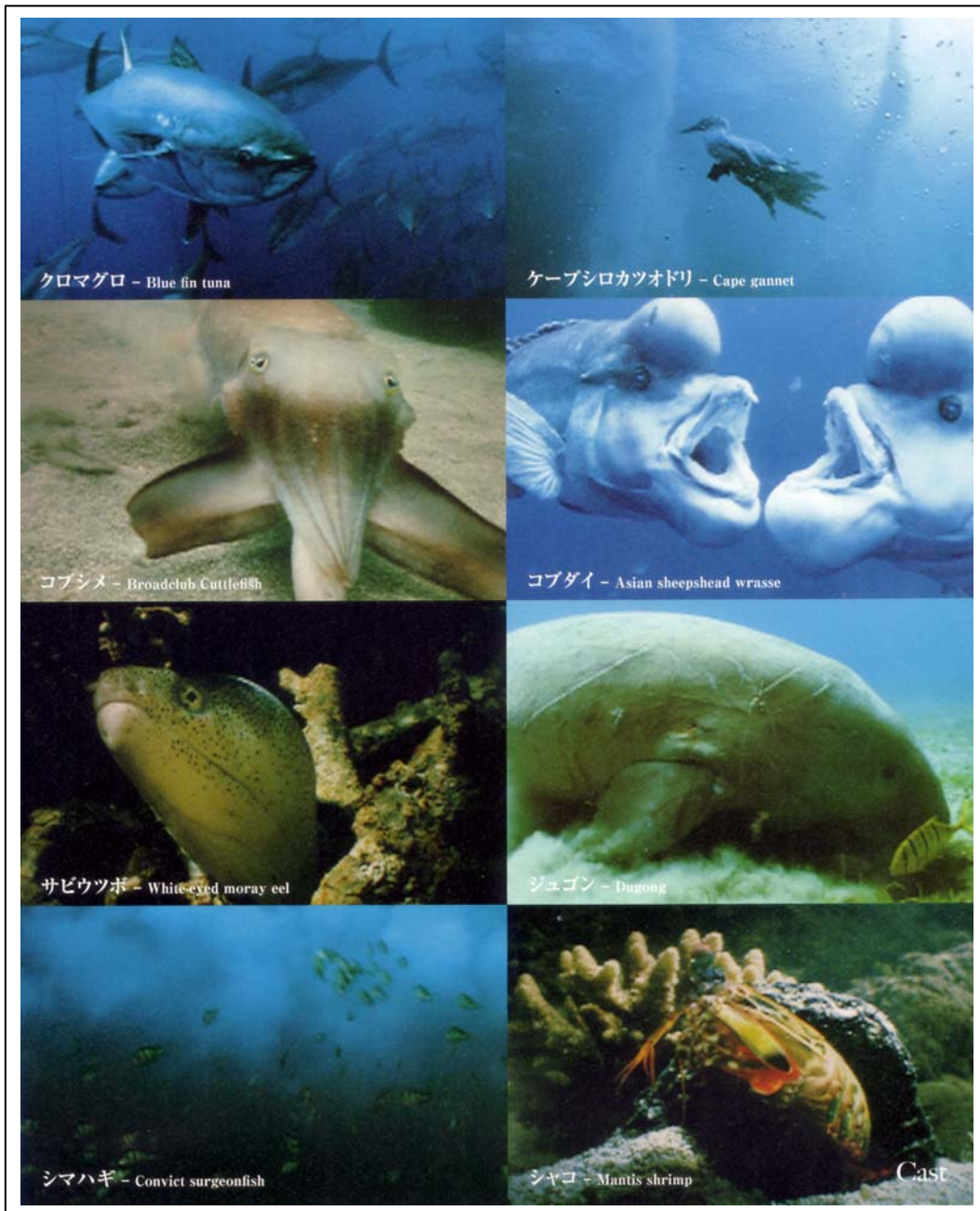


(C) 2009 Galatee Films - Pathe - France 2 Cinema - France 3 Cinema -  
Notro Films - JMH-TSR

数多い海洋生物の名前や、その大きさ、クジラ、イルカ、サメなどの周回路をわかりやすくするための大洋遊泳マップやパンフレットが出版されている。これはとても役に立つ。このパンフレットには、『オーシャンズ』の成功を支えたソニー製 HD カメラの最新技術や科学専門家たちのアドバイス、生き物を追って撮影する労力や年月や膨大な製作費用、スタッフ・クレジットされたカメラマンと水中撮影者に、2 人の日本人が参加していることなども記されているので良いガイドブックになる。



下の画像は OCEANS のパンフレットより、『オーシャンズ』に登場する生き物たち



## 資料

## 驚異のストーリーを産み出した撮影場所

・ガラパゴス諸島の西に位置するフェルナンディナ島は、最も火山活動が盛んな島。ゴツゴツとした溶岩で形作られた海岸には、ノアの方舟以前からの姿を残しているウミイグアナたちが生息している。そんなウミイグアナたちの不安そうな眼差しをよそに、フランス領ギアナにある宇宙センターから、轟音をたててロケットが打ち上がる。人類は宇宙へ乗り出して久しい。まだ本当の海の深さや、そこに息づく生命のこともろくに知らないというのに。

・南アフリカ、ポート・エリザベス沖では、ハセイルカによるすさまじい攻撃にイワシの魚群は縮こまり、海面のほうへと追いやられていた。すると、今度は上空から矢のように鋭いカツオドリがダイブが魚群を貫く。このダイブは時に水深 30m におよぶこともある。

・日本、島根県沖。海中を漂うビロードの織物のようなムラサキダコ。天敵に襲われると、広がると 1m にもなる膜を出して相手に巻き付け、膜をトカゲのしっぽのように切り離して逃げ去る習性を持つ。日本近海にも、こんな摩訶不思議な生き物が息づいているのだ。

・アルゼンチンから大西洋に突き出した世界遺産でもあるバルデス半島。オタリアは、天敵が近づいているのを知らず、白い砂の浜辺でのんびりとくつろいでいた。そこに一瞬の隙を狙ってシャチが電光石火の攻撃！ 難を逃れた仲間たちはその光景を呆然と眺めるしかない。

・オーストラリア、タウンズビル沖。隠れ家から出ようとするシャコの目の前に、カニが立ちはだかる。張りつめる緊張感の中、にらみあう二匹。一瞬の静寂ののち、カニからの痛烈な先制パンチ。強靱なハサミを武器にカニが終始圧倒するも、シャコの起死回生の一撃で大逆転！

・オーストラリア、ストラドブローク島周辺では、ハンドウイルカが波間から滑り出すように飛び上がっては、素早く姿を消す。抵抗になるはずの水流ですら、彼らの泳ぎを後押しているように見える。時には 50h/km 以上の早さで泳ぐ。“泳ぎの達人”だ。

・日本、佐渡島近海。異形の顔立ちのコブダイが、一面ミズクラゲが埋め尽くす幻想的な風景の間をぬって泳ぐ。ひょうきんな表情をしながら、実は、巻き貝を砕くほど強力な顎と頑丈な歯を持ち、ダイバーたちが警戒する魚でもあるのだ。

・オーストラリアの東海岸。フカヒレ漁の漁師たちはヨシキリザメのヒレだけを切り取り、不要な胴体は海に捨てる。身動きも取れず海底に沈んだヨシキリザメが最期の息を吐き出す時、普

段なら逃げ惑う餌のはずの小魚が、無警戒のまま目の前を通り過ぎる。

・**オーストラリア、メルボルン沖の海底**では、5万匹もの**クモガニ**が大量発生し、サッカー場ほどの広さを埋め尽くす異様な光景が広がっていた。場所によっては高さ1mになるまで重なり合って脱皮をしている。こうした異常現象が海のあちこちで起こっている。

・**ポルトガル、アゾレス諸島**。大きな群れをなして、海面を飛び回る**マイルカ**。まるで無重力空間にいるかのように、ふわりと海面に身体を踊らせ、クルクルと回転して見せる。とても活動的な種類のイルカのひとつだ。

・**アラスカ、チャタム海峡**では、**ザトウクジラ**独特の狩りが行われていた。数頭のザトウクジラが魚群のまわりを円を描くようにまわりながら泡を吐き出す。魚たちは泡に囲まれて逃げることができず、中心に集まり、徐々に海面のほうへと追いつめられていく。そこにザトウクジラの大きな口が猛烈な勢いで浮上し、獲物を一気に呑みこんでしまうのだ。

・荒れに荒れる**フランス・ブルターニュ沖**。嵐に巻き込まれ、強風がトロール漁船とその乗組員たちを激しく打ち付ける。船乗りは船首が何度も波に飲み込まれるのを目の当たりにし、逃げ場のない船内でなす術がない。港では5階建てビルほどもある灯台が高波に飲まれ、ブリッジは泡だらけのとばりの中に消えていく。

・氷で覆われた**北極海**。浮氷の合間から、牙が大きく突き出た**“海のユニコーン”**イッカクのシルエットが現れる。5〜10匹ほどの群れで、夏は海岸近く、海が凍結しだす冬は、沖合へと移動しながら、氷と共に生活する。

これらは10億年前から変わらず、今日も波は引き、打ち寄せている場所である。

監督・製作者・キャスト:

**ジャック・ペラン**監督は、フランスの人気俳優でありながら、ネイチャー・ドキュメンタリーの世界に魅了され前作『WATARIDORI』(’01)で、飛行する鳥に並走して撮影するという斬新なスタイルを確立したが、今回の『オーシャンズ』では、最高のスタッフと最新の技術を結集して本作のために開発された世界初の各種テクノロジーをダイナミックに駆使して、海洋生態の迫力ある瞬間を捉えることに成功した。

映画の**主要キャスト**は**海の生き物たち**である。人間は海洋博物館長の老人とその解説に耳をそばだてる少年。

撮影スタッフ:最新機材を抱え世界に散らばった12名のカメラマンとスタッフ。

彼らは、ザトウクジラの群れによる狩りは船上で18週間、世界の終末かと錯覚するほどの“完璧な嵐”をとらえるのには3年、前人未到の極北の地で終わりの見えない長期キャンプ、有人潜水艦の限界に迫る18000フィートの深海での撮影などに従事した。

最新機材:撮影を支えたのは最新機材である。

**HDカメラ“テティス”**:これはこの時点で世界に一台しかない海のステディカムで、波立つ海上を疾走する魚たちを追いかけながらも全くブレせずに水平な映像を捉えることを可能にした。

**魚雷型カメラ“ジョナス”**:海中を猛スピードで迫り来る魚の大群を正面から捉え、群れの生態を行動学的に初めて明らかにした。

**超巨大照明システム**:照明システムは、光が届かない海底の“自然な状態”を映し出すため、水中ではなく水上に設置された。

**無音小型ヘリコプター**:生き物たちに気づかれることなく近撮を可能にした遠隔操作の音のしないヘリコプターを使用した。

映画製作にあたり、構想10年、撮影期間4年、世界50ヶ所、撮影70回、そして100種の生命たち—『アース』製作費の40億円をはるかに超えてドキュメンタリー映画史上最高の70億円を投じている。それだけにかつてない「海と生命の物語」、『オーシャンズ』が遂に完成したというわけである。

